

## 巻 頭 言

# 香川の地で未来を構想する

— 「与えられ追いつく」からの脱却 —



香川県中学校教育研究会  
国語教育研究部会長  
大 林 克 暢

多くの教員が20歳代から学級担任を任され、生徒と向き合いながら教育者としての基盤を築いていく。産育休や育短勤務、部分休業を挟む人も、60代で教室の最前線に立つ人もいて、そのキャリアの歩み方は実に多様である。中には、部活動の指導を通じて県下をリードするような人もいれば、学年主任や生徒指導主事などを任されて活躍する人もいて、行政に携わる人や管理職になる人も出てくる。教室を離れた立場で学校を支える役割に就くと、それまでとは異なる視点や判断が求められるようになる。

転勤して仕事が以前より増えたと愚痴をこぼす人や、仕事量が同じでも働き方改革が進んでいないと言う人がいるが、私たちの賃金体系が年功序列で年齢とともに給料が上がる以上、業務が増えたり責任が重くなったりするのも当然と言える。教員は授業者としても管理者としても、年齢に応じて求められる力量が高まっていくが、与えられるわずかな研修にだけ頼っていて期待に応えられるはずもない。学び続ける（主体的に日々自己研鑽する）以外にないのだ。

ところで、誰が研究授業をするかを決めるとき、何とも言えない空気に場を支配されることがある。「校務を抱えて忙しい」「生徒指導が大変」「子どもが小さい」など口には出さずとも、早く決めて安心したいという、研究授業の機会が罰ゲームのように扱われる空気。そうならないように、ローテーション（輪番制）なるものが作られるが、それでも「研究授業を当てられる前に転勤したい」「研究授業がある学校には行きたくない」といった声がどこからか聞こえてきそう。一方で、やる気のある者も「やってみたい」と言えず、黙って順番を待つしかない空気。この空気感が我々の研究会を徐々に蝕む。

教師のキャリアは、任される役割、期待される力量が変わることで深化していくことも多い。変化を消極的に負担と捉えるか、積極的に成長の機会と捉えるかで、同じ取組でも見える景色は大きく異なる。情報環境が整い、学びの手段が豊かになった今こそ、自分自身のキャリアを主体的に設計し、「学び続ける教師」としての姿勢を確かなものにする好機である。

どの年代でどんな本を読み、どんな視点を学ぶかによって、視野は大きく変わる。学習指導要領が10年ごとに改訂されることを考えれば、常に学び続ける姿勢は避けて通れない。これまでは改訂後に慌てて教科書や指導法を確認することも少なくなかったが、情報へのアクセスが格段に容易になった今、香川県のような地方にしながら、都市部とほとんど時差なく最新の教育情報に触れられる。だからこそ、自ら学ぶ姿勢さえあれば、研究活動は「追いつくため」ではなく「未来を構想するため」の営みに変わり得るのだ。